

春ですね。うららかな、いい春です。絶対いい春ですよね。そうですよねっ。(↑いい春だと言い張る)。

さて、ここでクイズです。アントニオ猪木とモハメッド・アリとジャイアント馬場。この三人の共通点は何でしょう。格闘技の有名人？ そんな表面的なものではなく、もっと深いつながりがあるのです。今まで何気なく見過ごしていたこの三人の名前に、かくも奥深い共通点が隠されていたということは私も夢にも思っていませんでした。しかし、真実というのはいつか顕れるものです。つい先日、東京で我孫子武丸氏(こないだズームイン朝で、指を突き出して「ズーム・イン!」とかやらされてましたね。見ましたか?)と牧野修氏をまじえた打ち合わせの席上で、天啓のように私の頭にこの「真理」が降ってきたのです。そのとき私は、(宗教というものは、こうしてはじまるのだ……)と思いました。それほどその考えは劇的で、画期的で、ある意味怖ろしいものでしたが、いつの時代も真実というのは怖ろしいものです。こういう信じられないようなすばらしい着想が湧いてくる、というのも、春ならではでしょうかね。

話題を変えましょう。先日、和歌山のほうにクロダイ釣りをしにいきました。釣り船の船長の言うには、このあたりはナマダ(ウツボのこと)が多いから、気をつける、とのこと。私も、ウツボなんか大嫌いですから、びくびくしながら釣り糸を垂らしていると、肝心のクロダイはまるで掛からず、ウ

ツボばかり釣れるのです。餌をとられるうえ、ワイヤーを噛みちぎられるので、腹がたつやら気持ちわるいやら。私はウツボが掛かるたびに、船のうえでぐにやぐにや暴れまくっているのを、棍棒で頭をごん！と叩いて殺していました。釣りはじめて二時間もたった頃でしょうか、釣り竿に、「ずしっ」という手応えがありました。（これはクロダイにちがいない。やったぜ、ナイスガイ！）重くてなかなかリールが巻けないほど。よほどの大物だと、わくわくしながら必死になってリールを巻きあげると、これがクロダイにあらずして、またまたウツボで、しかもかつてないほどの馬鹿でかいやつでした。ウツボというより、伝説のオオウミヘビみたいに見えたほどです。船長が、「おおっ、こいつはこのあたりナマダの主じゃ。そうか、今日はどうもナマダばかり掛かると思っておったが、こいつのせいじゃったのか」と叫んだのもうなずけます。私は、釣りを台無しにされた恨みをはらすため、そのウツボを棍棒でめった打ちにして叩き殺してやろうと、リールを巻く腕に力を込めましたが、いやはやなんと重いウツボでしょう。リールから火が噴きそうです。あと少しでウツボを取り込むことができる、ということこそまでできたのですが、その「あと少し」がたいへんなのです。リールはきしきし軋み、まったく動きません。およそ一時間ほども格闘が続いたでしょうか。「糞つたれ！」私がそう叫んで、ロッドをぐいっと持ち上げた瞬間、ぶっつ、と音がして、糸が切れ、その巨大なウツボは海に落ちました。私は汗を手の甲で拭いながら海面をにらみつけ、「なんて重いウツボなんだ……」と呟くと、そのウツボがひょいと顔を出し、「それがこっちの重ウツボや」……「こんなあほみたいな駄洒落でこんな長いあいだひっぱるなんて、これも春ならではでしようね。

話題を変えましょう。狂牛病問題で焼き肉屋さんはどこもたいへんのようにですが、私は昔から焼き肉とかホルモンが大好きです。しかし、小さい子供がいるのでなかなか行く機会がなく、先日某ゲーム会社の接待を受けて、新宿の超高級焼き肉店に行ったのだが、そのとき熱があつて体調最悪で、とろけるような霜降り肉のやまを目の前にして、一口も食べる事ができなかつたのです。どれほど悔やんだか……というか、今でも悔やんでいます。テレビで「おいしい焼き肉の店」特集などやっている、ああああ、あのとき一口でも食べておけばよかった、と後悔の念にくれるのです。焼き肉やホルモンはおいしいだけではなく、身体にもいいのです。安全だと認められている牛肉は、どんどん食べるべきです。野菜ばかり食べていてはだめ。お肉や内臓を食べなくちゃ。それも、ロースばかり食べているだけではだめ。モツ、つまり内臓やレバーも食べてよ。あと、鶏肉、豚肉、羊肉なんかもりもり食べる。いいですか？ そうすれば、食べたものが全部、文字通り血肉となるのです。昔からよう言いまんがな、血肉モツ・レバーやマトンなる、て……これもひどいネタですが、没にせずに書いてしまふなんて、これも春ならではでしょうね。

話題を変えましょう。え？ さっきのクイズの答はどうなつたかつて？ ほとんどのかたがおわかりになつたかと思ひますが、一応書いておきます。答は蟻。アント・ニオ猪木、モハメッド・蟻、ジャイ・アント・馬場……と、名前に必ず蟻が入っています。強いレスラーは蟻に似たり、ということわざがあります。そのとおりですね。しかし、こんなすばらしいネタを披露したとき（新宿で夜中の12時半ぐらい、某ゲーム会社のAさんはボロカスのように私をののしつたのです。「あんたがうちのゲームの脚本家やなかったら、思っきり

蹴ってるんですよ。ほんまにあほちゃうか」とまで言われたのです。きつと嫉妬のせいですね。すぐ横にいた我孫子さんと牧野さんはフォローどころか、「そうでしょう。蹴られて当然ですよ」と強くうなずいていたのはいかなものではないか。きつと嫉妬のせいですね。

なんだかこうやってたらだら書いていると、また小ネタ集なのか、と思われたかもしれませんが、皆さん、そうではありません。

前回、三題噺を募集したところ、武田康廣氏を含む三人もの応募者があり、企画はたいへんな盛り上がりだったのですが、しめ切りに遅れた人がひとりおり、せつかなので、今回はそのかたのお題を使わせていただくことにしたのです。お題は「遅刻」。しかし、この「遅刻」に関していいネタが思いつかないので、こうやって世間話をしながら時間を稼いでいるわけです。

遅刻といえば、思い出すのは小学校。毎日毎日、キンコンカンコンと鳴り響くチャイムの音を聞きながら校門から教室に向かって走ったあのときの猛ダッシュ。そののち、会社に入ってから、その癖が抜けきれず、毎日毎日、遅刻ぎりぎりに駆け込んでいたものですが、だんだん「モーデーでもえーんちゃうの」という気持ち支配的になり、定時は九時なのに、出勤時刻はそのうちに九時半になり、十時になり、しまいには毎日十一時になってしまいました。普通の社員は皆、八時半には出社しているというのに。しかも、地下鉄やバスを待っていてはそれすら間に合わないの、毎日、梅田から会社までタクシーに乗っていたのです(もちろん自腹で)。私の給料のほとんどはこのタクシー代に消えてしまいました。当時の私はいわゆる二足のわらじで、朝まで小説を書き、ちよつと仮眠して、会社に出勤……という日々だったので、

気持ちとしては「しゃーないやん。定時に行くなんて無理無理」と思っていたうえ、ラッシュが大嫌いで、しかも、通勤時間を利用して、電車のなかでも携帯用ワープロで小説を書いていたので、どうしても座らなくては仕事にならなかつた……というような理由はあるのですが、会社にとっては個人の作家活動など知ったことではないわけで、今でも、会社員としては最低最悪の人間だったと思っています。今でも、打ち合わせなどに約束の時間ぴつたりに行くのは苦手です。たとえば三時に新宿の喫茶店で、という約束になっているとしたら、二時ぐらいにそこに行き、編集者が来るまでノートパソコンで仕事をしていよう……というぐらいの気持ちで出かけないとだめです。どうせ途中で本屋に寄ってしまったたり、CD屋に寄ってしまったりして、時間がどんどんなくなり、結局、喫茶店に着いたら、三時十五分……ということになるのです。逆に、編集者という人々は、けっこう時間にルーズなところがあり（私がつきあっている人たちがたまたまそうなのかもしれない）、よく約束に遅刻してきます。二十分ぐらい遅れるのはよくあることで、以前、二時間遅刻してきた人がいます。そういうとき、私は腹をたてているところか、仕事もできるし、本も読めるし、だらだら過ごすことができたいへんうれしいのですが、向こうは恐縮してしまつて、すいませんすいませんと謝ってくださいるので、なかなか気分がいいものです。しかし、あるとき、四時間待つて（その間、ずっと電話でやりとりをして、「もうすぐ行きます」「あとちょっとで出られます」と言われ続けているのです）、結局、「今日は行けないから、今から会社に来たまえ」と言われたときはさすがに自分の頭の血管がぶちぶちと切れた音が聞こえました。もちろん怒つたりせず、頭の血管もすぐにつなぎあわせて、歩いて三十分のところにあるその出版社

に行きました。仕事さえくれれば、何をされても何も言われてもいいのです。ところが、その人（初対面の編集者でしたが）は、仕事をくれないどころか、「えらい先生がたに頼んだら、売れるものを書いてくれるだろうけど、我々はあなたのように売れていない作家に仕事をさせてあげようと思っっている。そのうち頼むこともあるだろうから、そのときはよろしく」などと言われ、「じゃあ、ぼくは忙しいので」と打ち合わせ（？）は三分で終わり、私は呆然としてその出版社を出ました。そういえば、以前、ガイナックスという会社で、武田という人と打ち合わせをすることになり、六時に会社に来てくれといわれたのでひよこひよこ出かけていくと、彼は外出先での打ち合わせが長引いていてまだ戻ってきていない、とのことだったので、応接室でじっと待っていたのですが、全然帰ってきません。そのうちに「武田ほうから連絡がありました、かなり時間がかかりそうだ、とのこと。すいませんが、九時頃までお待ちいただけますか」と言われたので、「じゃあ、ホテルに戻って、もう一度九時に参ります」……

そして、九時前にもう一度来てみると、武田氏は外出から帰ってきていましたが、今度は社内の打ち合わせが始まってしまったらしく、もうしばらく待つてくださいとのこと、と言われたので、またまた応接室でじっと待っていると、そのうちに私は寝てしまいました。気がつく、応接室の電気はいつのまにか消され、私は真っ暗けのなかで眠っていたのです。誰かが、ソファによりかかっている私に気づかずに、「あれ？ 誰や、応接のあかりつけっぱなしにしたんは」と気を利かして消したのでしょうか。そうこうしていると、夜中の十二時ぐらいに武田氏が現れ、「いやあ、遅くなりまして。さっき一度来たんやけど、よう寝てたから起こすの悪いと思て」……起こしてくれよ。その日は、それから打ち合わ

せをしました。そうとう昔の話で、武田さんは忘れてるでしょうが、私は覚えていますよ、ふふふふ。こうして、過去の愚痴をぐずぐずこぼしてしまうのも、これも春ならではでしょうね。

えーと、何の話でしたかね。そうそう、「遅刻」でした。では、そろそろはじめたいと思います。一題噺「遅刻」でございます。「遅刻」というお題が出ましたら、手のほうをひとつお願いいたします。

「こんにちは。すんまへん、遅刻しまして」（拍手）

「お、やっと来たか。約束の時間からもう一時間もたってるげ。秀（ひで）、言いたあないけどな、編集者（エディター）は時間にルーズやゆうけど、おまはん、ちよつとルーズすぎるんとちやうか。編集者ゆう仕事は、人と会うことも多いんやさかい、もう少しきちつとしたらどないや。おまえのこと、友だち仲間最近、本名の秀丸やなしに、遅丸、遅丸ゆうとるらしいやないか」

「えらいすんません」

「わしに謝られてもなあ。こないだ、喜六が来てえらいぼやいてたで。おまはんと喫茶店で待ち合わせしたけど、一時間たつても一時間たつても来えへん。家に電話したら、まだいる。電話口で、ちよつとまたせたかいなあ、今から顔洗て、歯あ磨いて、朝飯食つて、二、三、用事をすませてから出かけるさかい、それまで待つといて、てなことを抜かしようた、ゆうてな」

「そんなんゆうてましたか」

「ナマ」のよつに濃厚とゆわれとる喜い公でさえ、あないして怒つとんねん。おまはん、そんなことしてたら友だちなくすで」

「でも、喜い公にはそのことを謝るつもりで、きのう、喫茶

店で待ち合わせしましてん」

「なんや、そうやったんかいな。それやったら丸うおさまったやろ」

「それがそうやおまへんねん。あの喜六ゆづやつ、気の短い男でっせ。そのときもわたいがちよつと待たせただけで……」

「ちよつとどれぐらいやねん」

「えーと……五時間ほど。ほんのちよつと」

「どこがやねん」

「あいつ、喫茶店から電話かけてきよって、「コーヒー五杯にカレーライス、オムライス、ミックスサンド食べて、腹ぱんぱんになってもた。どないしてくれるねん！ いいまして」

「普通、帰るわな」

「そうでっしやる」

「で、行ったんかい」

「行こうとは思ってんけど、いろいろ事情があったんで、結局やめました。ちゃんと店内アナウンスしてもらいましたで。』浪速区からお越しの喜六さま、浪速区からお越しの喜六さま、お連れさまの秀丸さまからご連絡がございましたのでお知らせいたします。今日はもうめんどくさなりましたので、また今度……とこのことでございませう。ピンポンパン……」

ゆづてね」

「無茶苦茶やがな。で、今日は何しに来たんや」

「わたいも、この性格をなんとかせなあかんとおもうてまんねん。遅刻常習を直す、ええ工夫はおまへんやろか。それをあんたに相談に来ましたんや」

「なるほどなあ。まず、待ち合わせに遅刻したら、そのことをちゃんとノートに書いておくことやな。あとあとの反省材料にするためや」

「遅刻の目次録、でんな」

「しようもない洒落をゆつてる場合やない。おまえのことやで。それから、待ち合わせに遅れたら、罰金を払うゆう取り決めをしとく、ゆづのもええな。遅刻したら、金がいるさかい、だんだん気いつけるようになるやろ」

「遅刻の沙汰も金次第、でんな」

「絶対に遅刻をしないという、激しい感情が大事やで」

「非遅刻激情、でんな」

「おまえ、真面目に聞くつもりあるんか、あほ。おまえのために一生懸命考えたとるんやがな」

「そう怒りなはんな。人間がちっこく見えまっせ」

「じゃああしい。もう、おまえにももの言つの、あほらしてきた。今日はこのへんにして、一杯飲もか」

「よろしいな。酒おまんのか」

「酒はあるけど、肴がないわ。三軒向このコンビニ行って、買ってくるわ」

「それやったらわたい、買ってきますわ。ちょっと待ってとくなはれ、すぐに戻ってきますさかい」

「すぐ、て、どねぐらいや。おまえのこっちやから、また、長いこと待たすんとちやうんか」

「あほなこと言いなはんな。三軒先でっしやる。ものの十五分もあつたら帰ってきますわいな。ほな、行ってきまっせ」

「そついつて出ていったが、もう四時間や。あいっ、どいまで行きよったんや。まさか事故にでもおつたんとちやうやるな。だんだん心配になってきたがな」

「ただいま帰りました」

「おおっ、秀が帰ってきてよったがな。よかったよかった。これでめでたしめでたしや」

「四時間も待たせましたのに、なんでめでたいんです?」

「忘れたか、今日の一題噺のお題は『秀のお帰り』やる」
「なるほど！……で、ちやいまんがな。『遅刻』ですわ」
「……………」

せっかくいただいたお題なのにこんなオチにしかならなくて……でも、これも春ならではしょうね。

(了)

御題「遅刻」を提供していただいた神上靖子様、ありがとうございました

(田中啓文・ガイナックス担当)